

「結婚式と赤い爆弾」

台湾人の結婚式は、新郎新婦の懐が潤うようできている

最近、育児仲間の謝さんが私に向って「赤い爆弾にやられた！」と嘆いた。彼女は小学校卒業以来、全く連絡の途絶えていた同級生に「爆撃された」と憤慨するのだ。

このエピソードを言いかえるところなる。「彼女は小学校の同級生から結婚披露宴の招待状を受けとった」。

街中にジングルベルが流れる年の瀬、台湾はまさに結婚シーズンのピークを迎える。華人というのは、一年のうちで旧正月をもっとも大切なイベントと捉えていて、更に「めでたい新年は、お嫁さんをもらつてよりめでたく過ごすのがよし」と考えている。いきおい旧正月前に結婚式を挙げるカップルが多くなる。

私もこの時期は結婚披露宴に参加する機会が増える。もちろん披露宴に出掛ける前には、必ず招待状を受け取る。この招待状は「喜帖シキテウ」と呼ばれるが、通常は封筒もカードも「まっかつか」

だ。

さて、なぜ爆弾などという物騒な言葉を使ったかというところ「喜帖」は本当に「赤い爆弾」という異名があり、その呼び方は一般に広く定着しているからである。由来はズバリ「喜帖」をもらったら最後、それ相応の出費を覚悟しなければならぬから。

おしなべて言うところ台湾の結婚披露宴は、キャンセルサービスも、ドライアイスも、引き出物（お祝い返し）もないので日本より費用が掛からない。通常は大勢で賑やかに会食して、食べ終わったらすぐ解散だ。

その為、特別豪華な披露宴でもしない限り新婚夫婦の黒字になる。一方「喜帖」をもらった側としては、どんなに疎遠な相手でもお祝い事なので出欠にかかわらず幾らか包まないわけにはいかない。

つまり「喜帖」はバラ撒けばバラ撒くほど新郎新婦の懐が潤うのだ。そういう訳で、もし新郎新婦が厚顔であればどんどん「赤い爆弾」で知人を爆撃してお金儲けをする。披露宴に来ない人が多ければ、お祝いだけもらうので収支はより理想に近づくという算段だ。

私自身は、たかだか台湾在住八年程度なので疎遠な人から「喜帖」をもらう機会はそれほど多くはないが、それでも過去に一回だけ「赤い爆弾」に当たったことがある。

爆撃手は通称小童シヤウトといい、以前勤めていたS社の同僚だった。副総経理（重役クラス）専任運転手の彼は社内巡回お喋りが日課。よく言えば社交家、悪く言えば嗜好きの放送局で、秘書と



恥しいポーズの結婚写真

して私はちょっと警戒していた。

さてその後、彼は客を迎えに行くのを忘れたり、高速道路で居眠り運転したりするミスを重ね、遂に四ヶ月分の給料を渡されて解雇されてしまった。

その彼が去ってからちようど四ヶ月が過ぎた頃、静かなS社社内はフイに小童の「赤い爆弾」によりじゅうたん爆撃された。笑顔で渡された赤い封筒を開くと、中からはドレスとタキシードで正装した二人の写真が刷り込まれた「喜帖」が。めでたい……めでたいんだけれども「なぜ今さらこれを……?」。小童は同業他社の運転手にまで「赤い爆弾」

を撒く徹底振りだった。

話しはそれるが、台湾人は結婚の時におびただしい枚数の写真を撮る。それは、結婚式の一ヶ月前までに撮影され、出来たものは「喜帖」に刷り込み、分厚い写真集に仕立て、且つタタミ半畳ほどの巨大な額縁に加工される。写真集の表紙は重厚な木製、サイズは市販のアルバムよりさらに大きく、厚さにいたっては電話帳二冊分はある超大作だ。この写真集と巨大額縁も披露宴の当日に入り口で一般公開するのが習慣となっている。

その為に「婚紗撮影」という専門の業者があり、衣装の貸し出しからヘアメイク、撮影、写真の表装までオールインワンで面倒見てくれる。お値段は三〇〜六〇ショットで三万〜六万円ほど。私も恥ずかしながら結婚した時、この台湾式の「婚紗撮影」に挑戦した。もちろん衣装はウエディングドレスからチャイナドレスまで六着をとつかえひつかえで、撮影はスタジオのみならず野外ロケも敢行。通行人の好奇の視線に耐えつつあちらの公園、こちらの美術館と三ヶ所も回った。他人のベンツにもたれてはパチリ、芝生に座り二人見つめ合ってはパチリ。結局撮影は夜まで及び全行程に丸一日かかった。

その仕上がりはと言えば……、やはり三万元パックの店は衣装が安っぽいので選ぶべからず。↓即、封印。

(私が結婚したのは六年近く前のことだが、この僅かな期間に台北の「婚紗撮影」のレベルは格段にアップした。今ほどの店も洗練され、グラビアのような自然で美しい仕上がりにある)

話しついでに書くと、台湾人はよほどの写真好きと見え、結婚するでもないのに「婚紗撮影」店に出掛けて記念撮影する人が若い女性を中心に相当数いる。それも、ドレスを着てプロにヘアメイクしてもらい、まるでスターのようなポーズを決めてだ。画面にはシャもかかるし、修正も入るので誰でも「それなり」に仕上がるようになってる。

若い子が自分の自慢の写真を写真集にしたり額にして飾ったりするのを見ると、本当に台湾人の欲望(スター願望)に対する素直さに感心してしまう。このように個人でお金を出して作った自分だけの写真集を「藝術照」という。

話しを赤い爆弾に戻そう。

小童からじゅうたん爆撃を受けた社内では早速対応策が検討された。祝儀は部署内でお金を出し合って一つにするという案も挙がったが、中には単独で包みたいという人もいて話しはなかなかまとまらなかった。ようやく出た結論は希望者だけ合同で包んで、当日出席する人に持っていつてもらおうというもの。私もこれに一口乗って一件落着した。

……それから二年近くの月日が流れ、この間私は小童と一度も会ったことはなかったが、ある日留守中に彼から電話が入った。彼は電話に出た夫に「子供が生まれた」と言ったそうだが、一体どういふつもりなのか？ 単なる社交家か、それともお祝いが欲しいのかよくわからない。

ところで結婚と言えばわたくしごとで恐縮だが、昨年我が妹（当然日本在住）が結婚した。仏教徒の家に育った妹だが、結婚式はイタリアのナントカ教会で彼と二人つきりで挙げた。なんでも、そのナントカ教会で式を挙げると、日本の戸籍に「イタリア国方式により婚姻」と記載されるのだそうだ。

最近珍しくなくなった「海外二人つきり挙式」だが、そう言えば台湾人が同様のことをした話は今まで一度も聞いたことがない。また、披露宴を一切しなかったという人にも会ったことがない。ということは、台湾人はほとんど例外なく両家をあげて披露宴をしているということになる。

る。

では、どんなふうに行っているのだろう。

結婚式については、台湾伝統式、原住民伝統式、キリスト教式、公証結婚式などが一般的である。台湾伝統式については私も経験がないので詳しくないが、地方によってかなり習慣が違うらしい。基本的には、新郎側御一行が新婦の家に派手な高級車（レンタルのベンツ）で迎えに行つて、皆で湯圓（白玉）を食べたり、ご先祖を拜んだりするらしい。

私自身は必要があつて公証結婚をした。これは地方裁判所で簡単な式をして、そこで出される結婚証明書を受理するものだ（この証明がビザ申請時に要る）。

もしも、誰かに何の説明もなくこの結婚式の写真を見せたらどうなるだろう？ なんだか「統一教会の合同結婚式」と誤解されそうで怖い。何しろ、何組ものカップルがずらつと会場に整列して挙式しているのだ。私たちはスーツ姿で参加したが、中にはウエディングドレス&タキシードで来たカップルも数組いた。

ところで裁判所というのは元来あんまり雰囲気の良い場所ではない。廊下には「家財差し押さえ請求」やら、「離婚調停」やらの手続きに來た険しい表情の人々が溢れていたが、そんな群衆の中を正装したカップルが長いベールを引きながら縫っていくのは奇妙な光景であった。まるで暗黒の宇宙空間で幸せいっばいの二人だけがぼつかりと浮き上がっているように見えたことを今でも憶えている。

さて、そんなこんなで遂に披露宴だ。

今を遡ること数年、私と夫は台北での披露宴をどうするか相談していた。

夫「ホテルやレストランでするのもいいけど、^{ハッパ}辦一番黒字になるよね……」

私「ええ!? 日本から両親や親戚も来るんだから、^{ハッパ}辦 鱈けは勘弁して! (涙目)」

ここは泣きを入れてでも「^{ハッパ}辦 鱈を阻止したかった。

「^{ハッパ}辦 鱈というのは台湾語だがつまりは「どこでも宴会」で、路肩や農家の庭先などにテントを張ってその下で宴会をするものだ。それ専門の業者もある。田舎は今でも^{ハッパ}辦 鱈披露宴が多いらしいが、台北市内では最近めっきり少なくなった(それでも葬式や選挙絡みの^{ハッパ}辦 鱈今だによく見かける)。

確かに、コストの点から見れば^{ハッパ}辦 鱈一番安上がりだ。テーブルは折りたたみ式、椅子はプラスチック、テーブルクロスはポリエチレン(ゴミ袋と同じ)で簡便だ。最も台湾らしいスタイルと言えなくはないが、そんな事情を知らない日本の両親にイキナリ出席させたら要らぬ心配をかけることは必至である。

結局相談の末、ホテルで披露宴することに落ち着いた。だが、逆に招かれる客の立場であれば^{ハッパ}辦 鱈露宴に出席するのも悪くない。料理の味も横浜中華街のヘタな店よりよっぽど美味しい、なにより気軽なので、近所のおじいさんや子供も多数やってくるのが賑やかで面白い。

「ナガシ」(日本語が台湾語化した)と呼ばれるバンドが仮設舞台で演歌を演奏したり、最後はお客とびりカラオケ大会になったりする。南部の田舎では「ストリップショー」もあるらしいが、私はまだ見たことがないので残念だ。

ところで^{ハッパ}辦 鱈言うとチープなイメージを持っていた私だが、この考えは二〇〇一年陳總統の娘さんが結婚した時に覆された。彼らは台北ではホテル披露宴をしたが、總統のふるさと台南では小学校の体育館で^{ハッパ}辦 鱈した(新郎新婦の出身地が離れている場合、このように披露宴を場所を変えて二回するケースもよくある)。

これがまた、生花を使った豪華な会場セッティングで真っ白のテーブルクロスも美しく、とても立派なものだった。台南の風土を配慮して、敢えて^{ハッパ}辦 鱈したのだろう(台湾人でも田舎の人ほど、お高くとまった政治家が嫌いなのだ)。

さて、^{ハッパ}辦 鱈話しはここでひとまず終わりにして、結婚披露宴そのものの本質に目を移そう。私だって日本でも何回か結婚式に出たことがある。それは仲人や上司の挨拶あり、キャンドルサービスあり、新郎新婦自らのカラオケ熱唱もありだった。まばゆいスポットライトも二人の動きを追っていた。それは、すなわち新郎新婦のハレ舞台であり、出席者も含めて全てが二人を盛りたてるように展開する。あくまで二人が主役。一世一代の大ステージと言える。

一方、台湾の披露宴の本質は「^{チヤク}請客」である。「^{チヤク}請客」とは客にご馳走し、もてなすこと。田

注 外字を使用している関係で一部文字がつぶれております。実際の書籍ではこのようなことはありません。

舎の披露宴でストリップショーを見せるのもひとつの「もてなし」の形なのだ。新郎新婦がお客様に求めるのは（祝儀を除いては）どんな高級な会場でも「楽しく会食してもらうこと」だけである。余興も万歳三唱も白ネクタイも一切要求しない。

反対にお客の側としても「義理」で出席することもたまにはあるが、その影は非常に薄い。なぜなら台湾では「沾喜氣」^{ツァンシキ}といい、おめでたい雰囲気に触れると自分も運が上向いてハッピーになれると信じられており、結婚披露宴に行くのは喜ばしいことと考えているからである。そこで招待客はゼロプレッシャーの中、思い思いの服装でやって来る。

服装に関してだが、初めて台湾の結婚披露宴に出掛けた時には面食らった。その宴会はレストランで行われたが、事前に私はどんな服装で行くか大変に悩んだものだった。当時はまだ留学生の身分であまりキチンとした服も持っておらず、慌てて友人の裕福なママムの所に行ってブランドもののスーツを借りた。バックも大家さんから借り、完璧な装いで出掛けたのだが会場に着いて呆然。

入口をうろついているトレーナーにジーンズの女性はもしや出席者？ その隣にいるジャンパー姿の男性も？

そのまさかだった。

とにかく気を取り直して会場入りしたが、中はなんとも騒然としていた。台湾の披露宴は席も別に決まってないので「新婦友人卓へ」と大雑把に案内されただけで、結局私はトレーナーのお嬢さんの隣に空いている席を見つけて座った。

このように、結婚披露宴も会場によってフォーマル度にバラつきがある。バントウの場合、客の服装は普段着にツツカケもありだ。レストランでもジャンパー姿容認、一流ホテルでやっと男性招待客の九割がネクタイ着用となる。因みに先日、ハイアットホテルの披露宴でポロシャツ姿の男性を見かけた。一流ホテルの披露宴でフカヒレ食べても、服装はポロシャツ……？ だが身なりもつまるところ祝いに来たお客の自由と認識されているのか、周囲は誰も特に気にとめていない様子だった。

ともかく、かように台湾の結婚披露宴はとてもフランクだ。日本人が初めて行くと拍子抜けしてしまうが、出席者としては至極気楽である。披露宴の主眼が「二人のオンステージ」というより「客へのもてなし」なので、海外で二人っきりで挙式して済ませるようなカップルがいなくても頷ける。

また、日本の披露宴で儲かるのは結婚式場だけだが、台湾では新婚夫婦が潤うというのも大いに理にかなっているように思う。

もつとも、私個人としては日本の結婚式と披露宴が好きである。自分が結婚する時はパスしたくせに出席するのが好きなのは、やはり格式ばった「非日常空間」があるからだ。おしやれにも気合が入るし、ひとときすまし顔でセレモニーに没頭するのはいいものだ。

台湾人の場合この「非日常空間」は、紹介した絢爛豪華な結婚写真の中に実現させているようである。

披露宴に大勢の客を呼んで両家のメンツを立て、そこで出た黒字は新婚旅行や新居の準備にあて、新居の壁には「非日常空間」の写真をかけて何年でも楽しむ。まったく、この上もなく合理的だ。台湾で披露宴がこういうスタイルに定着したのもそれなりに理由があるのである。

「漢方の真実」

台湾人は常識として漢方の基本知識をもっている

ウチの長男は三歳になるが赤ちゃんの頃から夜ぐっすり寝ないタイプであった。毎晩なにかしら息子に起こされるので、世話する方は疲労がべったりと体に沈殿してくる。その為だと思いが、ある時口内炎が出来た。ビタミンBを飲んでも塗り薬を塗っても全く効かずに三週間が過ぎ、口内炎はよくなるどころかどんどん増殖した。遂には同時に六つも出来て、水を飲むのも難儀なほどに悪化。

そんな時にたまたま駆け込んだのが「吉辰中医診所」という漢方医院である。この先生に粉薬を処方してもらい飲むこと三日。なんと六つもあつた口内炎は跡形もなく消えてしまったのだ。早い！ 安い！ 「吉辰」では保険が利くので、掛かった費用は全部でたったの一四〇元（約四九〇円）だった。

さてここでも「中医」という言葉について説明しておく。台湾では西洋医学のことを「西

医」、東洋医学あるいは漢方を「中医」と呼ぶ。そして薬もそれぞれ「西薬」と「中薬」と呼んで区別している。

またこの国では全ての国民が一律で「全民健康保険」に加入することになっているが、ほとんどの「西医」病院と一部の「中医」病院で健康保険を利用することができる。

なぜわざわざ保険について触れたかと言えば、中医の病院には保険が使える所と使えない所があるからだ。しかしこの両者とも医師は国家試験に合格し「中医師」の免許を持っている。違いは医師の方針だけである。健康保険でカバーしている「中薬」の薬材には制限がある。そこで、その枠を超えた処方をする医師は、もう始めから「ウチは保険が一切利かないから高いけど、いい薬出すよ」と標榜しているのだ。

だいたい前のことだが私は保険の利かない所にも行ったことがある。八徳路にある「瑞宏中医診所」というところだ。行く前から既に「スゴイ」という評判を聞いていたが、本当に予約の電話がいつも話し中で掛からない。何時間も粘つてやっと通じた時は、そんなになの？ と思ったが、実際行ってみたら本当にすごかった……診立てが。

ところでひとつ、日本の皆さんにきつちり伝えたいと思つていことがある。それは、漢方薬は医師がきちんと患者の体を診察して薬を処方してこそ最高の効果があるということだ。日本では漢方薬が非常に高価で、しかも一般には医師の処方によらず「買い薬」の域を出ていない点はずっと気になっていた。それでは例えば風邪を引いた時に、薬局で「ルル」を買って飲むのと同

程度の効果しか望めないだろう。

では中医師（漢方医）の診察とはどんなものかと言うと、そつと患者の手首に触れて脈を診る。脈を測るのではなく、暫らく脈を診て体の状態を診断する。これを「把脈」という。「瑞宏中医診所」の陳先生は中医の奥義をまざまざと見せてくれた。

予約のとれた私はやつこのことで小さな医院内にごつたがえす人々を掻き分け、先生の前に座った。しかし先生は「どうしました？」と聞いてくれない。そのかわりに無言で私の手首にポンと一瞬触れただけだった。

本当に一秒も触っていなかったが、手を離れた瞬間から「鼻が悪いね。しかももう何年もだ。それに風邪も引いてるし、喉も今いがらっぽいはずだ。よく背中も凝るだろう、不眠だしそれに……」とまさに立て板に水でまくし立てた。

その通り当時私は持病のアレルギー性鼻炎が悪化して、夜もよく眠れないほどだったのだ。その上、鼻以外に気になっていた体の不調も全て言い当てられ、私はもう何も説明することがなかった。先生の診立ては一〇〇%当たっていて、占いなのかと思つたぐらいだった。

これだけ体の不調があれば、普通「西医」だったら山のように薬を処方されてしまう。西洋医学は基本的に対処療法だからだ。しかし、東洋医学は不思議である。鼻炎も頭痛もその部位だけの問題ではなく、体全体の失調と捉える。従つて薬も、体全体のバランスを改善する目的で出されるし、重病だから特に大量ということもない。

しかし、アレルギー体質を変えるのは一朝一夕には無理である。私はこの病院に二ヶ月ほど通い、毎週薬をもらって飲んだ。保険が利かないので一日分の薬代に一〇〇元かかった。この薬は「これぞ漢方」と呼ぶにふさわしく、原料そのまんま。よくわからない薬草が色々ミックスされているものを、一包ずつ毎日鍋で煎じる。すると、強烈な漢方臭を放つ黒々とした薬が出来る。ゴクリと飲んでみると見かけほどは苦くないが、やはり飲みづらい。

鍋で煎じるのが面倒になって、途中で「自動煎じ器」なる、ヤカンと電熱器が合体したような器具を使ったが、薬の強烈な匂いは変わらない。台湾人は皆、昔からどこかしらでこの匂いをかいで育っているらしくあまり嫌がらないが、匂いに敏感な日本人にはけっこうキツイ。



漢方薬材

薬そのものも飲みにくい、もつと厄介なのは「瑞宏中医診所」が患者に一律に申し渡す「注意事項」だった。それは戒律と呼んでもいいほどで、薬の効果を妨げるものを一切摂ってはいけないという。酒タバコ禁止ぐらいならまだわかるが、この戒律はとりわけ厳しかった。コーヒーもお茶もダメ、果物もりんごと葡萄以外ほとんどダメ、揚げ物もダメ、野菜もあれとこれとそれはダメ、と非常に細かい。結局私は、症状が少し改善した所で全てが面倒になり挫折してしまった。もちろん鼻炎も完治していない。

その後、何か特に不快な症状がある時は、前出の「吉辰中医診所」のお世話になっている。保険が利く医院の方針はつまり「保険でカバー出来る薬で大丈夫。足りない時は別に保険の利かない薬を出すよ」ということだ。

しかし、保険が利く所だから効きがイマイチかと侮るなかれ。私の以前の同僚は結婚後三年間子供が出来なかつたが「吉辰中医診所」で不妊の薬をもらい、二ヶ月飲んで妊娠したのだ。

私も長男出産後「うつ状態」がつかつたが、ここの盧先生に診てもらって快癒した。この先生は「不眠」や「鬱病」「不安神経症」等精神系の病氣治療の腕もいい。薬は粉で出してくれるし、注意事項もそれほど厳しくない。

そして、中薬のいいところは医者と相談すれば西薬と併用することも出来るし、徐々に西薬の量を減らすことも可能な点だ。

ここまで読んだ読者は「いったいこの病院は何科なのか？」と思つたかもしれない。実は中医には、特に何科という区別がない（強いて言えば、捻挫などを診る「骨科」と「それ以外」に分けられるが）。

それも、つまり人の病気を体全体の問題として見るからだ。

さて、先に中医も国家試験合格が必要と書いたが、何を隠そう台湾には本当のモグリ医者というのもある。「密医」と呼ばれるが、漫画のブラックジャックとは違って医大さえ出していない。単に先祖代々の薬の処方を持っていて、ある特定の病氣にだけ薬を出す。完全に薬事法違反の

「密医」の看板は当然どこにも出ていないので、その情報は口コミだけだ。

先日近所のオジサンが「帯状性疱疹」（ヘルペス）という病気にかかった。発疹がとても痛いそうである。オジサンは西医では痛み止めしかくれなかったと言って、遂にこの病気専門の密医の門を叩いた。八〇〇元の薬を持ちかえったオジサンの病状はその後快方に向っている。自分はお世話になりたくないが、密医もそう悪いものでもないらしい。

ところでこれほど重症でなくとも、ちよつと具合が悪いことは誰にもよくあるものだ。私は毎年冬になると本当によく風邪を引く。この冬もあんまりしょつちゅう喉や頭が痛かったので、日本から買ってきた「パブロン錠剤」を一人で一瓶開けてしまったほどだ。

近所の西医にも何回か見てもらったが、薬が切れるとすぐまたぶり返してしまう。持って生まれた虚弱体質の上に、育児による睡眠不足がたたって本当にカラダはボロボロ。

お陰で私はよく人に健康食品や漢方薬を勧められる。幸いにというのか夫はヘビースモーカーで夜も毎晩三時に寝るような不健康な生活を送っているくせに、健康食品が大好きで我が家には彼が買ってきたモノが溢れている。ちよつど風邪が抜けなくて困っていたところなので、試しに私もウチの在庫品を飲んでみた。

まず在庫NO. 1高麗人参エキス。……まずい！ しかし、そこをコラえて飲むこと数日。これが全く調子よくない。そこで在庫NO. 2冬虫夏草に切り替えた。中国のオリンピック選手も飲んでいるというので、すぐく効きそう！ これは錠剤なので飲みやすかった。だが飲むこと数日、だんだん喉が腫れ、頭も痛くなって来た。

しかたがないので、今度は在庫NO. 3刺五加にシフト。刺五加とはシベリアなどに自生する多年性灌木で、これを飲むと体内摂取酸素量が増加するという。すぎる思いで粉状のモノをぬるま湯に溶かして飲むこと数日、なんと頭痛が治るところか肩まで痛くなって来た。

ここへ来て私も遂にギブアップ。またしても「吉辰中医診所」に駆け込んだ。仏像みたいに穏やかな顔の盧先生に、「私はこれだけのモノを試してみたのに少しも体調がよくなる」と訴えたところが……。

「あなたの体質は虚熱だから、調子が悪い時にこんな熱いモノを飲むとよけい酷くなる。人参や冬虫夏草や刺五加は確かに体にいいけれど、みんな熱いモノだからね」と先生は言い、反対にからだを冷やす漢方薬を処方してくれた。

これを飲むこと数日、遂に私の病魔は退散したのだった。

しかし、盧先生の解説は一般台湾人にはわかるらしいが、私にはよく理解できなかった。そこで、「漢方食事療法」関係の本を買い込んで読んでみた。一般に健康食品と呼ばれるものが、何故自分には合わなかったのか知りたかったからだ。

本にはまず漢方の立場から考える人体について書かれていた。人間の体は様々なバランスの上

になりたっている。栄養のバランス、陰陽のバランス、各臓器とカラダ全体のバランス、摂取する五味（酸苦甘辛鹹）のバランス等たくさんある。とにかく、どれも偏ってはいけないのだ。

そして今回問題となったのは、陰陽のバランス。体の陰と陽はどちらが強すぎても弱すぎても病気になるってしまう。私の場合はこの陽が強すぎて体が熱い方に傾いてしまっていたのだ。なお、この状態を表現する言葉は中国語で「虚熱」「燥熱」「陰虚」「火気大」「上火気」など沢山あるが、理解しやすいようにここでは熱い方に傾くという表現に統一しておこう。反対に陰が強すぎて体が冷たい方に傾く場合もあるし、陰陽ともに足りない人というのもある。

体が熱い方に傾くといっても、別にほてったり熱が出るとは限らない（そういう場合もあるが、私などは暑がりでもなんでもない）。しかし、口が乾く、口内炎ができる、色々考えが浮かんでよく眠れない、動悸が激しい、暑気あたりでぐったりしている等の症状が複数出ている場合はそうかもしれない。

私は、この熱い方に傾きやすい体質なのだそうだが、一般には暑い夏に人体は熱い方に傾きやすいという。

反対に体が冷たい方に傾くこともある。重症の冷え性等の場合はそうかもしれない。一般には寒い冬に人体は冷たい方に傾きやすくなる。

このバランスを手っ取り早く整えるのが、食事療法である。

全ての食べ物は「熱、温、平、涼、寒」の五種類に分けられる。その属性は、中華民族が数千

年かけて人体の反応を観察し発見したものだ。いわゆる漢方薬も、すべてこの五種に分類できる。

例えばスイカ。これは「涼」に属するので、私のような人間が食べると調子がいい。夏バテでぐったりしている時は、適量食べると暑気払になるだろう。しかし、体が冷えてお腹が痛いような人は、食べると下痢をする可能性が高いので注意が必要だ。

以上の説明でわかるとおり、一般に健康によいとされる食べ物でもその人の体質、体の状態によって毒にも薬にもなるのである。結局我が家に山積みの人参エキスや、冬虫夏草は私にはあまり役に立たないどころか、体調を崩すもどだった。

これについて中医の盧先生はこんなアドバイスをしてくれた。

「熱い方に傾きやすい人が、それでも熱い食品を健康の為に摂取したい時は、体調のよい時を選んで、一日飲んで二日休むペースを繰り返すといい。それならあまり過度に熱くならないから」

さて、読者の今の体は「熱」と「冷」のどちらに傾いているだろうか？ 実際は、中医の診察を受けないとハッキリとはわからない。なにしろ風邪にも風熱型感冒（前述の私の風邪）と風寒型感冒があり、それぞれ全く違った食事と薬が必要になるのだ。

それでも食品の属性を知っておくのは損ではないだろう。ここではより簡単に三種に分類しておく。

- 一 温熱食品……羊肉、犬肉、海老、酒、酢、唐辛子、ニンニク、ねぎ、生姜、ニラ、にんじん、ライチ、栗、桃等
- 二 平性食品……米、とうもろこし、大豆、豚肉、牛肉、たまねぎ、かぼちゃ、蓮の実、マツシユルム、葡萄等
- 三 寒涼食品……蕎麦、緑豆、豆腐、豆乳、鴨肉、蟹、昆布、セロリ、ほうれん草、白菜、大根、ニガウリ、冬瓜、きゅうり、たけのこ、レンコン、なし、柿、スイカ、バナナ、サツマイモ、マンゴー等

知った上で食べてみて、調子が悪いようだったら同属性のモノも控えてみるといいだろう。なお、冷え性だが寒涼食品を食べたいという場合は、火を通して食べるとかなりその寒涼性質が緩和される。

ただし繰り返しですが、人体バランスをつかさどるものは上記の陰陽バランスだけではなく、様々である。栄養その他、何につけても均等に摂取するのが肝要だ。

次に手元の本の中から、一般的な漢方の食事療法の例を挙げておこう。

便秘……水分、繊維食品を多くとること。酒、タバコ、辛いもの、濃いお茶、コーヒー、砂糖は控える。牛乳、乳製品、グアバ、肉、卵は取りすぎると便秘が酷くなる。蜂蜜は腸の動きを滑

らかにするの可。

下痢……油もの、寒涼食品、冷たいもの（アイスクリームなど）、刺激物、繊維が多い食品は避ける。豆類、大豆製品、サツマイモなどお腹が張りやすいモノも不可。蜂蜜やローヤルゼリーなどは「潤腸通便作用」が強力なので厳禁。お茶はそのタンニンに止瀉作用があるので、薄く入れて飲むとよい。リンゴ、グアバ、柿も止瀉作用あり。

咳……酒、タバコ、コーヒー、甘いもの、寒涼食品、脂っこいものと海老、蟹、辛いものすべて不可。咳が激しい時は就寝前に生シユウガの薄切りを、口の内側と歯茎の間（両サイド）に挟んで寝ると症状が緩和される。または、シユウガを潰して赤砂糖と煮たものを毎日一回飲むのもよ。

それにしても、こう見てみると色々「うるさい」こと。でも、台湾の人は本を読まずとも上記のようなことはほとんど常識としてマスターしているらしい。特に中年以上の人はうるさくて、よく公園で名も知らぬオバサンに「咳の出る子供に甘いもの食べさせるな」などと意見される。あっぱれな漢方の「医食同源」思想は、このように台湾人の生活の中がっちり根を張って

る。私のような外国人はいちいち話を聞いているとうるさくてしかたがないが、それでも最近は何となく耳を持つようになった。それはすなわち、自分の体の声に耳を傾けるということだ。食べ物を食べてみて、体が何て言うかちよつと注意すると人は健康になれるらしい。

参考文献：中華食療学 張正浩主編
養生食療寶典 陽維傑医師著

「算命の都」

台湾人が占いを利用するのは、自分の人生に積極的だからである

算命とはいわゆる占いのことである。算命には雑誌などに載っている西洋占星術、血液型占いはもとより、中国伝統の姓名学や紫微斗数ペイクンとウァンシュ、更には霊能者による透視まで含まれる。この算命は香港同様、台湾の人々の生活に深く浸透していて、どこからどこまでが占いや縁起かつぎ、あるいは慣習なのかちよつと区別しにくいこともある。これから、台湾人と占いの関わりを紹介しよう。

ビジネスで初めての相手と接する場合、まずすることは名刺交換だろう。台湾人の名刺をもらって、社名、肩書き、名前を確認する。するとしばしば名前の脇に小さくカッコ書きでもうひとつ名前が書いてあることがある。

例えば陳 凱文（学良）などとなっている。この意味は「戸籍上は学良という名前だが、凱文

という名前を通称として使っているので、そう呼んで欲しい」ということだ。これは別に芸能人だからではなく、一般人でも大変よくあるケースだ。

台湾人で複数の名前をもっている人は非常に沢山いる。まず便宜上、若い人のほとんどが英語名を持っている。更に本名以外に中国名を持っている場合、これは九〇%以上占いによるものだ。中には戸籍の名前ごと変えてしまう人もいる（それはウチの夫）。

かなり前にキムタクの長女の「心美」という名前は画数がすばらしいと話題になったが、台湾人に言わせれば姓名学に生年月日を加味しないのは全く意味がないのだという。

例えば、生まれが非常にいい星回りで、更に最高の画数の名前をつけてしまうと、お互いが強すぎて衝突してしまうのだそうだ。そこでこういう場合は、そこそこの名前をつけなければならぬらしい。

ところで先日我が家に次男が誕生したが、この時はどうやって名前をつけたのか？ 夫は近所の画廊のご主人（占いの腕はプロ級）にアドバイスを仰いだ。台湾は占いの専門家が多いので、子供の命名を素人が本を参考にして済ますことはまずない。

このご主人の姓名判断の流派は最近流行のもので、画数を一切見ない。本人の干支と漢字の相性がポイントだという。例えば申年の場合、猿は木が好きだから木へんがある漢字を使うのがよいとか、未年（うづみ）の次男は口と相性が悪いので「高田」という名字はよくないとか……。

さて、話しはかわって新築マンションの話題。ある時、友人（台湾人と結婚した日本人妻）がマンションを買った。「引越したら遊びに来てね」と言っていたが、その後何ヶ月たっても引越さない。聞けば内装工事中だというが、どうもそれが風水師の言うなりにアチコチ間取りを変えている様子。そしてここでも主（あかし）の生年月日が必要になる。同じ間取りでも、ある人には吉また別の人には凶となるそうだ。

結局、ガスレンジや水道管まで移動する大工事の末に新居は完成した。しかし、その後半年過ぎて彼女は家に呼んでくれない。以前の家にはよく呼んでくれたのでおかしいなと思っていたら、それは占いの師の「一年間は他人を入れてはいけない」という指示を厳密に守るご主人の意向があったからとのこと。彼女の話しでは、日本から実家の両親が来たときもその掟は守り通し、家にあげなかつたそうである。

一般に風水師の指示は、間取りだけにとどまらず、引越しの日時から、水槽中の金魚の数まで微に入り細に渡ってなされる。このご主人はその後も占いの言うとおりに、一定期間菜食で通すなど忠実な行いを続けている。こういった指示をすべてクリアするにはかなりの労力を要すると思うが、こういう御仁はそんなに珍しくない。

なおつけ加えておくが、彼は日本とアメリカの両方でマスターをとったエリートで、知的レベルは相当高い。どうやら、風水重視度と学歴は関係がないらしい。

風水は古来より大変ポピュラーらしく、現在でも特に商売関係のところでは重視されている。

どこかのオフィスやショールームで変な位置に水槽があったり、やたら大きな馬や龍の置物がある場合は、その可能性が高い。ハイアットホテルのロビーに掛かっている巨大な額が、風水によるもののは有名な話だ。別に皆が盲信しているというわけではないが、安心できるのだろう。

安心したい時と言えば、一生の大事「結婚」である。占いを信じない人でも仏滅の挙式は避けたいの人情だ。日本人でもそのぐらいの感覚はあるのだから、台湾人も同じこと。台湾で、結婚の時に占い師に日取りを見てもらわなかったという人はかなり意思強固なカップルと言える。なぜなら、この件に関しては本人が無頓着でも、外野が黙っていないからだ。ほとんどのカップルが「八字」を見てもらう。

「八字」とは中国古来の占い方で、生まれた年、月、日、時間のそれぞれに「丙午ひのえうま」とか「甲子きのえね」とか二文字ずつの時間名称を割り出し、全部で八文字になることからそう呼ばれるらしい。二人の八字をつき合わせて占うことから、中国語で相性が悪いことを「八字不合パイイツフア」と言う。「八字不合」で婚約破棄した話は今まで聞いたことがないが、何か問題がある時は占い師の指示によりなんらかの手立てが考え出される。

例えばこんなことがあった。旅行仲間の通称「小温ショウオン」がいきなり結婚して、もう新婚生活を始めていたという話しが伝わった。仲間の誰も知らなかったので皆びっくり。その上披露宴は当分しないと、さてはおめでたかと思っていた。しかし、その半年後開かれた披露宴で会っ

た新婦は、ぴっちり細身のドレスを纏っており、そんな様子は微塵もない。後でこっそり友人が教えてくれたのだが、この手順も占いによって決められたものなのだそう。

なんでも、占いの結果で二人は「二度結婚する運」だったそうで、そのままいけば二人は離婚してそれぞれ再婚するコースを辿ることになる。そこで、まず先に挙式した後で、しかるべき日取りに改めて披露宴を行うことで、「二度結婚した」ことになってしまうらしい。

このように、占いは台湾人の生活の中にきっちり根を下ろしている。出産時の帝王切開の間も、お葬式の日取りも占いで決めるのだ。

さように台湾で占いは非常にポピュラーなもので、ちょっとその辺の人に聞けばすぐにお勧めの占い師を紹介してもらえる。後述はすべて口コミで「当たる」と評判の占い師達である。気がつけば私も長い台湾生活の間に、日本からの客を案内したりして色々な占い師を訪ねてきた。いずれも個性たっぷりの面々である。

その① 中山北路「小神仙」（手相占い）

日本から遊びに来た妹を連れて、初めて訪ねた台湾の占い師。短パン姿のオジサンで見かけは屋台のオヤジといった風情。待っている間に前列で占っている様子を見ると、この人は手相見とは言うものの、ほとんど掌を見ていない。客の生年月日時を聞いてチラッと掌を見た後は、



小神仙の看板



鬼気迫る 小神 仙の占い

名前も聞かずトウトウと一方的にしゃべり出す。生まれた時から始まって、何歳の時に何が起こったのか、目はほとんど閉じていて鬼気迫る。お客は全く口を挟む暇もなく、遂には自分の死ぬ年齢まで聞かされる。質問タイムは最後。

怯えているうちに私の番にな

り、恐る恐る手を指し出したが占い師はジロジロ手を眺めながら何か探している様子で、口を開かない。そして不意に「苗字は？」と聞くので答えると、すかさず「それは先祖代々の姓ではない」と言い放ち、これには姉妹ともども驚かされた。というのも私達の父親の苗字は事情があった、父方母方どちらのものでもないのだ。

オジサンは「二十九歳の結婚は中吉だが、三六歳の結婚は大吉」と言ったが、果たして私はその後二十九歳で結婚した。しかし後日、私の恋人（今の夫）も見てもらったが「今の恋人（つまり私）とは結婚できない」と言われた記憶があり、オジサンの予言もパーフェクトとはいかなかった。

なお、この話しには後日談がある。占いに案内してくれた張さん（彼女自身は占っていない）が帰宅すると、ルームメイトにこう言われたそうだ「あんた、今日どこかへんなどころに行かなかった？ さつき小鬼が家の中に入ってきてウロウロしていたから、厳しく言って追いついたわよ」（中国語で小鬼とはお化け、もののけの類を指す）。

その② 呉興街「官羅太太」（八字占い他）

私の中国語の先生イチオシ占い師で、先祖代々の秘伝ありと言う。生年月日時間と名前を告げると、紙にお客のデータを書いてゆき、中国式ホロスコープ（？）の横にアドバイスなども書き連ねて最後に渡してくれる。

推薦した先生の話しによると官羅太太は以前、四〇歳独身恋人ナシだった義妹に向かって「来年結婚、財運アリ」と予言。なんと義妹は本当に翌年弁護士と結婚したそうだ。しかし私にはたいてい具体的な予言はしてくれなかった。

だが、官羅太太が言ったとおりの年に、言ったとおりの男の子が生まれたのは事実。一時間近く話してくれるので、カウンセリングの効果が期待できる。

その③ 基隆「劉さん」（霊能者 客の気持ちで祝儀を包むシステム）

霊能者で特に千里眼の人を台湾では「通霊」と呼ぶ。意外にもかなりの数いるのか、私は数人

の「通霊」についてその評判を聞いたことがある。劉さんは肝っ玉かあさん風で、見た目まったく普通の人だが、本人曰く仏教徒の菜食主義者。

名前と生年月日時間を告げると、彼女は普通の口調と目つきでこう言った。

劉さん「二〇代の頃に大きな病気をしなかった？」

私「はい」（実際、臥せて半年間学校へも行けないほどだった）

劉さん「その時、どこかお参りに行っただけでしょう？」

私「えーっと、あつたかな？」

劉さん「あるはずよ。その時仏様と縁を結んだの。そうでなければ、こんなに早くよくならなかったはずよ。でも、その後お礼参りをしていないわね？」

必死で一〇年以上前の遠い記憶をたどってみると、確かに私は当時密教のある寺院にお参りにいったことがあつたのを思い出した。忘れていくくらいだから、当然お礼参りなど行っていない。

さらに驚いたことは、彼女が名刺を見ただけでその人の風貌をかなり正確に言い当てることだ。夫が上司の名刺を差し出すと「この人は髪を短く刈り込んでいて、寸詰まりの小太り。人と話すときに小刻みにうなづく癖がある。あなたを信用しているわ」と言った。

確かに非凡な能力を感じたが、彼女の特技はただ占うだけではない。何か問題があつた場合に呪術めいたことを施して、力添えするのだ。縁結び、縁切り、邪魔者封じなど色々あるらしい。

（別料金）

しかし、彼女が夫に「今の会社に二年勤めた後、ミャンマーへ渡る」と予言したのは大外れだった（夫の会社は翌年倒産してしまつたし、ミャンマーにも行かなかつた）。

その④ 行天宮地下街「女命相」（米卦他）

ここは日本人女性二人をエスコートして行っただけで、自分は占っていない。行天宮地下街は多数の占い師が軒を連ねる、ガイドブックでもお馴染みの占い処（日本人観光客多し）。米卦とはお客に米粒をつまんでバラバラと皿の上に落とさせ、卦を立てるもの。それに生年月日時間を加味する。占い師の遠まわしな話し振りによると、どうやら女性の一人は後妻の運、もう一人は一生独身の運で私も通訳に苦心した。

なお、私は以前にも行天宮地下街の別の店で、友人が占うのに付き添つたことがあるが、こちらは早い話し「やらすばつたくり」だった。二〇分ほどで一〇〇〇元もとつた上に、占つた内容は実情にかすつてもいなかつた。よく占い師が有名人とのツーショット写真を掛けているのを見かけるが、全然アテにならないので、ここで占いをしたい観光客は要注意だ。

以上、私の経験をご披露したが、いちおう評判の占い師というのは「過去、現在」部分についてはそれなりの的中を見せたと言える。ただし、未来部分となると、かなり難しい。人によって占い師との相性もあるのかも知れない。

けれど台湾の古い結果が悪い場合、何らかの対策が採れるようになっていくことが多い。例えば名前を変える、おまじない（お祈り）のようなものをしてもらう、風水で家具のレイアウトを変える等。その為、皆古い結果を聞いて落ち込みっぱなしということはなく、「来年までは運が悪いが、おまじないをしてもらったからのり切れそうだ」などと気持ちの支えにする人が多い。これらは中国が古来より時間をかけて発達させてきた、ひとつのテクノロジーと言える。そこからは彼らの能動的な性格が窺われる。以前私の中国語の先生が言っていたが「結果が悪ければ以後注意するし、それで何事もなければ占いの当たりはずれに關係無くないこと。それに、占いの結果が良ければ自信がつく」のだそうである。つまり、自分の人生を積極的に理解し、問題があれば甘受するだけではなく、自分から良い方向へ持つていこうと働きかけるのだ。

確かに占いやおまじないの効果について疑問符は取り去れないが、ともかく何がしかの癒し効果があるようである。かの林真理子氏も「占いは心のエステ」と言っているように、これは彼らのリフレッシュ法のひとつなのではないだろうか。

「犬はアウトで蛇はイン」

台湾人は犬やとろろは食べないが、蛇なら食べる

ある水曜日のことだ。その日姑は自宅に仲間を集め、マージャンに興じていた。マージャンも佳境に入った午後一時ごろ、部屋にいるはずの飼犬「小不点」（チビの意味）がいなくなっていることに気づき大騒ぎ。その日は客の出入りが激しく、いつの間にか外へ出てしまったらしい。

家族手分けして探したがみつからず、姑は食事も喉を通らぬ意気消沈ぶり、三日目の朝、居ても立つてもいられず廟へ犬の行方を探ねに出かけた。廟とは台湾各所にある道教と仏教が入り混じったお寺のようなもので、おみくじが無料で引けて、係の人に解説もしてもらえる。姑がおみくじの解釈を頼むと係の人は「この犬はもうお腹割かれて死んでるね」とすげなく言い、姑をさらに落胆させた。

この話を聞いた夫は「たった三日で、食われるなんていくらなんでも早すぎるよ」と言った。

「食われる？」と思わず私が聞き返すと

「犬を捕まえるのを商売にしている人がいてさ、捕まえて犬肉屋に売って聞いたよ」と平然としている。

しかし私は内心どうも納得いかなかった。というのも、台湾では通常マンションの部屋の中や、店先で犬を飼っていることが多いが、あまり繋がらない。それで、街のいたるところで、飼い犬がぶらぶらと勝手に公園を散歩したり、路でゴロ寝をしていたりするのを見かける（お陰で街は犬のウンコだらけだ）。そののんきな様子からは、捕まって犬肉屋に売られる危機感のみじんも感じられない。

私がそんなことを考えている間にも、夫は言葉を続けた。

「知らない？ 犬肉は香肉と呼ばれて、とても精がつくと言われてるんだ。原住民とかが食べるらしいよ。俺は食べたことないけどね。一般に犬は1黒2黄3混色4白の順にうまいって言われてるんだ」

因みに小不点はグレーで、1から4のどこにランクされるのかよくわからない。

ただ、食われないまでも小不点が帰ってくる確率はかなり低いと思った。もういなくなった犬のことをあれこれ言うのもナンだが、小不点は私が今まで出会った犬の中でも最も体が弱く、かつバカだった。トイレの躰もできておらず、毎日部屋の床に垂れ流し。しかも結石持ちで、専用

の缶詰を食べないと死んでしまうのだ。姑は散歩にも連れ出さなかったもので、一度外へ出たら帰り方もわかるまい。

そんな犬の肉を食べても美味しいはずなろうと私は思ったが、姑は「あんなに丸々太っていたし、あそこの葬儀屋の人が犬を食べるって噂だ」と言い、たずね犬のピラを貼り歩く日々を送っていた。

それで結末は……？ 姑の祈りも虚しく小不点の消息はようとして知れず、そのまま帰らぬ犬となった。

確かに古来中国では犬肉食の習慣があった。だがそれにしてもどうも夫の言うことに信憑性を感じられなかった私は、数人の台湾人に犬肉食のことを聞いてみた。すると案の定、皆が皆首を横に振って「とんでもない」と言うではないか。「私は犬を食べた」という台湾人にも今まで会ったことがない。従って私は、現代の一般台湾人はやはり犬肉食は「アウト！ 気持ち悪い」と思っていると判定する。

だがその反対に「イン！ 食べても平気」の部類に入るのが蛇である。それを私が知ったのは割に最近のことだ。

台湾は高温多湿で、肌の悩みを抱えている人が多い。病院に行けば薬はくれるだろうが、結局

は症状を抑えるだけで塗るのをやめればまた元に戻ってしまいうことも多い。

ウチの息子も軽いアトピーである。そんな話しを育児仲間の楊さんしたら、ずばり「蛇が効く！」と言うではないか。

蛇？ 蛇の何が効く？ 蛇の毒でも塗る？ 正解は「蛇スープを飲む」だ。

以前彼女の三歳の娘が、掌を痒がってしかたがなかったことがあった。口コミで評判の皮膚科にも診てもらったがよくならなかったという。そこで「蛇」だ。

「蛇スープ」……この私も何回か台湾人にご馳走になったことがある。随分熱心に勧められた記憶があるが、なるほどあれは蛇スープ↓体にいい↓おもてなしによし、という真心を表現したものであったのか。

さてその求め方だが、まずは店先にズラッと並べられた籠に入っている活き蛇と目を合わせないように入店。料理が出てくるのを待つ間も視線は泳がせずに固定。うっかりしていると店内で主人が蛇をウナギみたいにシャーツとさばいているのが目に入ってしまう。蛇の身は大きめのドジョウを開いてブツ切りにしたような感じでスープに入っている。薬味にしょうが少々。味は淡白で魚の澄まし汁に似ている。

それで、その三歳の娘だが、この蛇スープだけ（蛇肉なし）を二回ほど飲んだらすぐに痒みが止まり、以後再発もしていないという。これは、蛇肉に肝臓の解毒機能を高める成分が含まれており、それが皮膚に影響するからだそう。

なお、台湾でも蛇料理は日本のすっぽん料理ぐらいレアなものだが、台北だと華西街や通化街などの夜市に専門店がある。

従ってすべての台湾人が蛇食を好むとは限らないが、ともかく蔑視する風潮はこの国には全くない。

犬はアウトで蛇はイン。トンソクは完全にインだが、では豚の脳はどうだろうか？ その答えは市場が教えてくれる。



市場の豚の脳は血もしたたる新鮮さ

つまり市場で売っていれば、その食物はインである。さあ、市場の豚肉屋へ……この軒先にぶら下がっているものこそ豚の脳。うねうねと皺が寄った形を崩さぬようにそつとビニールに入れてもらって帰ろう。

なにしろ非常に柔らかいので食べる時は、スープの具にするのがポピュラーだ。煮すぎないのがコツ……らしい。実はウチの夫の好物で

もあるが、さすがに私も自分で料理したことがない。

しかし食べたことはある。味はこれまで淡泊で、口当たり柔らかく魚の白子と大差ない。但し、食べるのは豚の脳であって、猿の脳などはどこにも売っていないのでそこを誤解しないで欲しい。

それで問題の効能だが、彼らは「吃脳補脳^{チキョウポウノウ}」と言っている。脳を食べれば、自分の脳もパワーアップするという意味。この考え方は広く適用されていて、肝臓が悪ければレバーを食べ、腎臓が悪ければ腎臓を、とバリエーション豊富だ。現代ではあまり科学的根拠はないとされているがそれでも年配の人はかなり信じて実行している。

このように同じアジア人であっても、台湾人と日本人では食物に対する受容の基準がだいぶ違う。これをもう少しまとめてみよう。

台湾人がイン（食べても平気）と思う食物

「カエル、蛇、豚の脳と耳と腸と……ほとんど全身、鶏の睾丸とお尻、ガチョウ、すっぽん、鴨の舌と首と脳など」

台湾人がアウト（気持ち悪い）と思う食物

「犬、馬刺し、イカの塩辛、とろろ、△活け魚造り、△白子、△生卵、△納豆など」

（△は一部の人は食べられる物）

台湾は過去に日本統治を経験しているので、刺身を食べられる人も多い。但し、活け魚造りで魚が口をパクパクさせているのには嫌悪感を持つ人が大多数だ。白子にいたっては、食べる習慣が全くない。

基本的に中国の伝統的観念では「生食は非文明的」とされているので、馬肉や山芋をナマで食べるのには相当抵抗があるようだ（通霄山芋はスープの具にする）。また台湾人も豆腐乳など発酵食もよく食べるが、塩辛のようにナマのまま発酵させているものにはお手上げ状態。

よく日本で売られているガイドブックには、「台湾の食」を面白おかしく揶揄気味に書いているものがあるが、「奇異」と思うのはあくまでワンサイドの見方。反対側からは台湾人も日本食を「奇異」に思っているのである。

立ち読み禁止
はこまで